

# 資料渉猟余話

その3

飯田市仲ノ町にある公益社団法人下伊那教育会が所有する参考館の中に、「羽生永明文庫」と称される蔵書がある。これは、昭和四十二年、同氏の遺族から教育会に寄贈された永明の遺稿や書籍である。

羽生永明（一八六八〜一九三〇）

は、明治維新の变革期に生を受けた飯田の人で、旧制飯田中学校をはじめ、岩手・岡山・東京等の初等・中等・高等学校他に勤務した教育者である。彼は郷土史研究の草分けとも目され、飯田の堀家を中心に研究した『堀の漣』（十五冊）をはじめ、『伊那人物誌稿』（十八冊）『下伊那郡誌稿』（十七冊）等を著した。それら稿本の中に、県歌「信濃の国」にも歌われる太宰春台関係のものが多いとあり、そこにこれから述べようとする書翰が遺っている。

この手紙は、当時（明治四十四年）、私立青山学院教授となつて、東京赤

坂高柳町に住んでいた永明のもとに、飯田から郵送されたものである。中身は、県歌「信

濃の国」にも歌われる太宰春台の遺蹟保存会設立趣意書と寄付の依頼である。ここに言う遺蹟とは春台の邸宅跡のことであり、今日の太宰松周辺を指す。

四百字ほどの趣意書の前半は、

## 一通の書簡が語る太宰春台

### 鎌倉貞男

一、同地積及手植松ノ周  
囲二柵ヲ設ク  
の四点を具体的に明記している。

書翰は、「太宰春台先生

「…先生は信陽飯田の人…后東都に出で、刻苦精励研鑽愈々深く学徳益々高く、権貴に屈せず、名利を求めず、…一意学風の流布、子弟の教養に心力を傾注したり。…為めに、当時の世道人心に及ぼしたる感化挙げて数ふべからず。」と、春台を賞讃している。

後半は「然るに、今や其邸宅廃れて跡を留めず、独り手植の松空しく

天に参して巨幹龍吟の韻を發するのみ。」と、現状を憂え、「此處に同志相諮り、遺蹟保存の挙を遂行し、以て碩学の余薫を不朽ならしめ、世の風教に資するところあらしめんとす。…」と、趣旨を述べている。

そして、目的とする事業は、  
一、買入地積約百五十拾坪  
一、同地積内家屋移転  
一、建碑

一、同地積及手植松ノ周  
囲二柵ヲ設ク  
の四点を具体的に明記している。

遺蹟保存会」の名で出  
されているが、いろは

順で記された主唱者の  
名前を見て驚く。なぜ  
なら、そこには、例え  
ば伊那電敷設の功労者

伊原五郎兵衛、県  
議や代議士を勧め  
た上柳喜右衛門や  
北原阿智之助、飯

田市の初代市長野原文四郎、峡谷画壇の中心的日本画家大平小洲、松濤義塾の創始者松村蓬麻等、政治・経済・文化・教育等を主導した人達の名を連ねるからである。

また、幹事には旧制飯田中学の初代校長島地五六や、飯田小学校長中村七五郎らの名が見える。察するに、この運動が広く学校や家庭にも浸透していたことが伺われる。

いずれにせよ、こうした人々の努力によって、太宰春台の顕彰が図られ、今日中央通りの飯田労働金庫前に見る生家跡の遺蹟保存が為されたことを思うべきであろう。



二代目太宰松と「太宰邸址」の碑

